

# 認知症対応型サービス 取組事例普及事業

～認知症や障がいがあっても自分らしく地域で暮らしていきたい～

平成21年3月

山口県健康福祉部長寿社会課  
山口県介護実習普及センター

## はじめに

高齢化が進む中、平成16年12月より「痴呆」から「認知症」への名称変更を機に、認知症になっても尊厳を持って安心して地域で暮らし続けるための様々な取組が各地で行われており、地域住民の関心も高まってきています。

その中で、地域において認知症の人たちや家族を支えるには、認知症への対応（予防、早期発見、ケア等）を行うマンパワーや拠点などの「地域資源」をネットワーク化し、相互に連携しながら有効な支援を行う体制を構築することが必要です。

特に地域に密着したサービスを提供している認知症対応型共同生活介護、認知症対応型通所介護及び小規模多機能型居宅介護は、認知症の人たちが地域の中でその人らしい生活を継続するためには切り離せないものだと思います。

しかし、地域に密着しているこのような事業所が、具体的なサービス内容について知る手立てがないことも現状です。そのために、県内の認知症対応型サービスを実施している事業所において、適切にサービスを提供したり、地域・家族と適切に連携をとっている事例等の情報を収集し、分析・評価し、事例として取りまとめ、普及するための資料を作成しました。

この事例集に記載できなかった事業所の中にも、すばらしい取組をされているところはたくさんあると思います。本書に記載されている事例は、ほんの一部にすぎませんが、認知症の人たちの支援につまずいた時、元気づけられ、何かのヒントになれば幸甚です。

最後に、本書の作成に事例を提供することにより御尽力いただきました皆様、作成の際に御協力してくださいました皆様に心からお礼申し上げます。

平成21年3月

財団法人山口県ひとづくり財団  
社会福祉研修部  
山口県介護実習普及センター

# 目 次

## 1 事例紹介

### (1) 一人ひとりを見つめる

- 事例1 その人を知り、自分自身を知るために『言葉集』を作った事例 — 1
- 事例2 男性利用者一人ひとりを見つめるためにセンター方式を  
活用した事例 — 3

### (2) 元気に生きる

- 事例3 活気のある生活を継続していくために、浜松方式を取り入れ、  
その人らしく生活を維持していく支援を行っている事例 — 5
- 事例4 認知症があっても、社会の中でリズムのある暮らしを継続  
するために心身両面の活性化に努めている事例 — 7
- 事例5 認知症高齢者でも簡単に楽しくできる「ゆる体操」を、ボランティア  
の指導者を迎え指導を受けながら取り入れている事例 — 9
- 事例6 パーキンソン病の認知症高齢者とのコミュニケーションの  
方法を工夫し、安心して生活できるようになった事例 — 11

### (3) 地域の中でその人らしく生きる

- 事例7 地元の祭りや行事に参加することで、地域の人との繋がりの  
大切さに気付いた事例 — 12

### (4) 地域の人たちと共に生きる

- 事例8 小学校の草取りをとおしてグループホームでできる社会参加  
の取り組みをしている事例 — 13
- 事例9 お泊まりボランティアの協力により、夜間、利用者や職員が  
安心して過ごせるようになった事例 — 15
- 事例10 その人らしい生活を継続するために、行動障害の対応を  
しつつ、家族・地域・事業所が連携をとっている事例 — 17
- 事例11 住宅街で地域住民との関わりを密にしながら、利用者が  
我が家と同じように生き生きと生活している事例 — 19

(5) 認知症の人を支える人たち

- 事例12 医療的な援助を行うことにより、その人らしく安心して安全で居心地よく生活している事例 ———21
- 事例13 利用者に顔なじみの現地駐在職員を配置し、要請された介護サービスに即応する事例 ———22
- 事例14 「魅力的な介護現場で働きたい」を支援する為に職場の満足度調査を実施し、働く環境を整備している事例 ———23

(6) 認知症の人の家族を支える

- 事例15 本人をとりまく関係者との連携をとりながら、認知症の人を抱える家族を支える事例 ———25
- 事例16 グループホームに入居しながら、同じ法人内の施設入所の夫を看取った事例 ———27
- 事例17 認知症の人を介護されている人の悩みや負担を軽減する為、介護者教室を開催している事例 ———29
- 事例18 若年性認知症と診断された妻を持つ家族への関わりについての事例 ———31
- 事例19 安心した生活を目標に帰宅願望のある利用者との関わり方対応に工夫している事例 ———33

(7) 社会資源としての事業所活用

- 事例20 小規模多機能型居宅介護事業を地域へ広報、普及するための推進活動（小規模多機能型居宅介護事業所協議会設立） ———35

(8) その人らしい生活を継続する

- 事例21 利用者の生活スタイルに合わせたサービスを提供している事例 ———37
- 事例22 スタッフ・家族・ボランティア等の連携、活躍できる場面づくりで、ここで暮らしてよかったと思えるよう支援している事例 ———39

(9) 最後まで共に生きたとき

- 事例23 ターミナルケアにより家族の思いの大切さに気付いた事例 ———41

- 事例24 ありのままを受け入れ、その人らしい生活継続のため、家族  
・地域・医療・事業所が連携して「看取り」を支援した事例 ——43

(10) 問題が起こったときの取組

- 事例25 安全な生活作りのためのリスクマネジメント活動をして  
いる事例 ——45

3 事例の分析・評価・まとめ

○分析・評価 ——47

○まとめ ——50

4 協力事業所及び協力者

○協力事業所名簿 ——51

○協力者名簿 ——52

# 事例紹介

## (1) 一人ひとりを見つめる

事例 1	その人を知り、自分自身を知るために『言葉集』を作った事例 (グループホーム)
---------	---

### 〔背景〕

年に一度、秋に開催する文化祭では、利用者が日々の生活の中で作られた絵や折り紙・縫い物・育てた植物・活けたお花、そして生活を切り取ったたくさんの写真などを展示している。これらの作品を通じて、利用者がここでどんな生活をされているのか、来訪された家族や外部の人々に知っていただく機会にもなっているが、その作品のひとつとして『言葉集』がある。

『言葉集』とは、作品を作ることが難しい人も、何か主役になれるものかと考えた時に、「何も作れなくても、その人その人に思いや言葉がある。」という思いと、「ここで出会い、一緒に暮らしている皆さんと過ごした時間を形として残すことはできないか。」という思いから始められた取り組みである。

### 〔内容・現状〕

グループホームを開設してから毎年、9名の利用者一人ひとりに担当スタッフを決め、スタッフそれぞれが文化祭に向けて『言葉集』を作成する。

『言葉集』とは？という質問に答えるのはとても難しいが、ただ、単純にその人が発せられた言葉を拾い集めるだけではなく、笑顔・涙・表情・たたくまい、その人のこれまで生きてこられた歴史までも感じさせられるようなもの、その人がその場所にいるだけで漂ってくるオーラのような、空気のようなもの。その人の心や思いまでも含めたものなどが、その人の言葉で、また、スタッフの言葉で表現されるものである。

その人の『言葉集』を作るために、スタッフがどのくらいその人の側にしようとしているか、関わろうとしているか。その人をどのくらい感じようとしているか、分かろうとしているかが大切で、それらをきちんとしなければ言葉は拾い集められない。スタッフの仕事に対する熱意だけではできない。その人への敬い、優しさ、思いやりも大切で、スタッフの人間性も問われるような苦しい作業である。

しかし、それはそれだけで終わらない。スタッフは、その集めた言葉・心・思いなどから自分自身が気付いたこと、思ったことがある。その気づきや思いが言葉を集めるのと同じくらいとても大切なものとなる。

つまり、その人の言葉などから、その人を、その人の生活や歴史をどう思うのか、どう感じるのかは、自分自身を、自分自身の歴史をどう思うのか、どう感じるのかにつながっている。その人の言葉・心・思いをフィルターとしてスタッフが自分自身を振り返り、見つめ直す機会となり、その人を知る事は、自分自身を知ることにつながっている。

## 〔所感・今後取り組みたいこと〕

毎年、個性豊かな『言葉集』が出来上がる。スタッフそれぞれの『言葉集』への思いやこだわり、また、スタッフ自身の利用者への思いやこだわりがあり、作られたものは全て違う、同じ物は二つと無い。

他のスタッフが作成したものを読んで、ハッとさせられることもたくさんある。これもまた、その利用者への気付き、来年の『言葉集』への気付きにつながる。ゆっくり作成に時間がかけられない中、スタッフの産みの苦しみを乗り越えた『言葉集』は、どれを読んでも利用者一人ひとりへの「愛」があふれたものとなっている。それらを読むと利用者のことがこれまで以上に好きになる、もっともっと知りたくなる感じがする。今後も続けていきたい取り組みである。

課題としては、家族や外部の方も読まれるため、差し障りのない言葉を選んでしまいがちなところである。

「寂しい、苦しい、辛い、痛い、悲しい、家に帰りたい、ここはどこなのか、私はもうだめです、何の役にも立たない老いぼれ、死にたい・・・」という言葉は、家や家族から離れ、知らない空間で知らない人たちと生活し、徐々に確実に年老いていく自分の率直な気持ちである。私たちはそんな人たちの何がいったい分かるのだろう・・・と思い悩む。そんな言葉を家族に伝える事は余計に心配させたり、致し方ない思いで遠く離れ別々に暮らす方法を選んだ家族を苦しめさせたりすることになるのではと感じ、いまだ悩ましい思いでいる。

そんな悩みがありながらも私たちは、利用者の人たちの姿に少しでも近づきたいと思っている。人は語ることで自分の存在の意味を見いだしていくと言われるが、それには私たちが、利用者の語りに耳を傾けることができるような自分自身であるかどうかも問われている。それを試されるものが『言葉集』なのかもしれない。

### Aさんの言葉

「前の畑にたまねぎを植えましょう」  
「この畑を水仙畑にしましょう」  
Aさんの言葉には、少しずつ先が見える。  
つい、その日その日を何となく過ごしてしまう私  
『目標』という大げさ感はなくとも、自然に  
ちょっと先を見据えて生活することの大切さを  
教えていただいている。

### Dさんの言葉（詩で表現してみました）

ありがとう  
「おかえり」の言葉  
「ほ～ばいじゃげえ～」の笑顔  
「おいしいよ」の声  
「よばれんさい」「に～ちゃん」の呼び  
「・・・・・・・・」の寝顔  
みーんな私達（スタッフ）を元気にしてくれる  
みーんな私達（スタッフ）を優しくさせる  
言葉や笑顔のひとつひとつに  
「ありがとう」と素直に言える

### Cさんの言葉（スタッフが表情や動作から思いを汲み取ろうとしている人）

ご家族が面会に来られる度に涙で迎えられるCさん。その涙は嬉し涙だと思えます。  
Cさんとご家族、お互いの言葉にならない想いが、優しいまなざしになって、涙の向こうにつながります。  
Cさんにとってかけがえのないご家族。そしてご家族にとってかけがえのないCさん。  
「みんな誰かにとっての大切な人なんだ」・・・という、当たり前のことを思いださせてくれる、あったかい瞬間・・・。

### Cさんがスタッフの顔をじっと見つめるとき・・・。

そこにはいろんなCさんの思いがあります。  
私は手を引かれ部屋まで連れて行ってくださる時、何をすることもない、ただ、「そばにいて」という強いメッセージをCさんから受け取るのです。それは、引いていく手の力の強さや、じっと見つめる目やCさんの全身から。



## (1) 一人ひとりを見つめる

事例 2	男性利用者一人ひとりを見つめるためにセンター方式を活用した事例 (グループホーム)
---------	--

### 〔背景〕

当ホームは定員9名のうち女性利用者は4名、男性利用者は5名である。女性利用者は利用者同士で日常的に話をしたり、一緒にテレビを見たりとお互い関わり合っている。しかし、男性利用者はお互い関わることはほとんどなく、一日のうちほとんどをそれぞれ一人で過ごされている。そのために『認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式』（以下センター方式）を活用して一人ひとりを見つめ、より個別のケアが必要だと思ったことがきっかけである。

### 〔内容・現状〕

利用者本人や家族から聞いたこと、スタッフが感じたこと、気付いたことをセンター方式 C-1-2（心身の情報）シートに書き込み、その情報を基にさまざまな思いや願いの実現に向けたケアに取り組んでいる。また、D-4シートを日々の記録に用いて、利用者が精神的に落ち着かなかったり不安になったりするタイミングを見だし、その時の関わり方を工夫するように努めている。

ある男性利用者 Oさんは、時々自宅の様子を気にする方で、一度気になり始めると一日中そのことを考え、イライラしてしまったり不安になったりすることが度々あったため、外出という形で定期的に自宅に帰るという計画を立て、実行し、安心感を得ている。

その他に、毎日のように自宅のことが気になり、帰りたい思いを抱いている男性利用者 Aさんは、家族の都合などにより Oさんのように帰宅することができない。そこで、D-4シートを用いて日々の様子を家族に伝えて、どのようにすれば Aさんに安心を感じてもらえるかを相談した。その結果、自宅や息子の携帯に電話したり、妻や息子が病院帰りや仕事帰りにホームによって話をしたりすることで、家族との関わりをしっかりとってもらう方法をとっている。

また、ビールを飲みたい男性利用者 Fさんには、その思いを叶えるため、本人や家族から以前自宅でどのくらいの量飲んでいたので、ビールの銘柄はなんだったかなどの情報収集をして、それを基に家族や医療機関と話し合い、一日の量と時間帯を決めて飲んでもらっている。

このように、一家の主として家への思いやビールなどの嗜好品は、男性特有のものであると思われる。また、現在入居している男性はどなたも、今までなんらかの仕事をしてこられ、仕事中心の生活をしてきた人々である。そのため、女性利用者

のように編み物や料理などといったホームの日常の中で比較的取り入れやすい趣味・特技がないため、日常の中での充実感や達成感・責任感を得ることが難しい。

〔所感・今後取り組みたいこと〕

例えば、物を作る仕事をしてきた人には、日曜大工としてホームで活用できそうなものを作る活動を入れてみたり、地域のための活動に積極的に参加していた人には、子どもたちの登下校の安全を見守る活動をしてみたりすることによって、誰かに認められ、頼りにされ、充実感や責任感を持つことができ、日々の生活に生き甲斐を感じることはできないかと考える。

そのためにも、センター方式シートを用いて本人や家族・知人などから、その男性利用者の以前の仕事に関することや日常生活の様子（どのような夫・父親であったか）など、詳しく情報収集し、その情報を関係者が共有し、ケアにつなげていけるよう取り組んでいきたい。

(注)『認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式』

仙台、東京、大阪府の3つの認知症介護研究・研修センターで共同研究され開発されたアセスメントツール。本人中心のケアを継続するためにはケアの共通認識が必要であることから、5つの領域（A 基本情報、B 個人情報、C 心身状態アセスメント、D 焦点アセスメント、E24 時間生活アセスメント）から構成される。

※下図：C-1-2（心身の情報）

右図：D-4（24時間生活変化シート）

C-1-2 心身の情報 (心身の状態) (本人記入)

氏名: [Name] 性別: [Gender] 年齢: [Age] 生年月日: [Date]

住所: [Address]

職業: [Occupation]

家族構成: [Family Structure]

既往歴: [Medical History]

アレルギー: [Allergies]

服薬: [Medications]

喫煙: [Smoking]

飲酒: [Alcohol]

身体機能: [Physical Function]

認知機能: [Cognitive Function]

精神状態: [Mental State]

生活習慣: [Lifestyle]

趣味・嗜好: [Hobbies]

その他: [Other]

D-4 焦点情報 (24時間生活変化シート)

氏名: [Name] 記入日: [Date]

◎ 1日の生活の変化です。2時間の単位に何が影響を与えていたのかを把握して、定期的に変わるタイミングや内容を身につけてください。

※ 1日の生活が「起床」から「就寝」までの、このあたりにあつたり、時間をあけてはあつたりして記入してください。

※ その日の生活の様子や、その日の生活の様子を、あつたりと具体的に記入してください。

※ 空白記入して、パターンを見出し、気づきを共有する機会を身につけてください。

時間	起床	起床後	起床前	起床後	その時の具体的な様子や場面	影響を与えていると思われる事	気づきや、変更してほしいこと	記入者
4	0	0	0	0				
5	0	0	0	0				
6	0	0	0	0				
7	0	0	0	0	起床後、着替え、朝食			
8	0	0	0	0	洗濯機を回す			
9	0	0	0	0	洗濯機を回す			
10	0	0	0	0				
11	0	0	0	0				
12	0	0	0	0				
13	0	0	0	0	夕食の準備			
14	0	0	0	0	夕食の準備			
15	0	0	0	0	夕食の準備			
16	0	0	0	0	夕食の準備			
17	0	0	0	0				
18	0	0	0	0				
19	0	0	0	0				
20	0	0	0	0				
21	0	0	0	0				
22	0	0	0	0				
23	0	0	0	0				
24	0	0	0	0				
1	0	0	0	0				
2	0	0	0	0				
3	0	0	0	0				

※ フォントサイズ・個人情報が保護を考慮してください。

## (2) 元気に生きる

事例 3	活気のある生活を継続していくために、浜松方式を取り入れ、その人らしく生活を維持していく支援を行っている事例 (認知症対応型通所介護)
---------	---

### 〔背景〕

早期認知症改善のため、浜松方式の脳活性リハビリを取り入れ、活力のある(意欲向上プログラム)生活を維持していき、その人らしく生きていくための支援を行っている。

### 〔内容・現状〕

脳活性プログラムの一環として脳活性プリント、散歩の実施、季節感を味わうための外出プログラムなど感性を養うために取り組んでいる。脳活性プリント(小学3・4年生レベルの計算問題・漢字問題など)は能力維持や脳の活性化を図れ、できる事(全問正解)に対しての自信にもなり、意欲向上につなげることができる。

散歩は下肢筋力の維持・改善にもつながり、有酸素運動をする事で脳に新鮮な酸素を取り込み、また道端に生えている花や草などの話題を会話しながら行うことにより感性も養える。(花の美しさや種類など会話しながらゆっくり歩く。)

季節感を味わうための外出では、(見当識障害の改善のため)四季折々が感じられる場所に出掛け、「その季節ならではの喜びや楽しさ」といった感情を引き出す事もできる。

レクリエーションに関しては、常に考える力を養うためにおもしろい取り組みも行っている。2つのトランプを使用したダブル7並べや、「あかさたな」カルタなど、考えて行わないと出来ないゲームをする事で思考が養え、認知症の進行防止につながっている。特に「あかさたな」カルタは声を出しながら行わないと難しく、軽度の認知症の人には最適なゲームであると考えられる。(ルールは7並べと同様で横つながりで行っていく。縦つながりは禁止とする。)

当事業所では最も力を入れている事が2つある。その一つが仲間作りである。認知症になるきっかけの要因の一つとして、配偶者の死別や仲の良かった人たちとの別れなど、精神的ショックから起こる寂しさや孤独感で、意欲の減少もしくは意欲消失になることが挙げられる。意欲を引き出すためには友達を多く作ってもらう事を目標にしており、毎回握手会の実施を図っている。握手をする事は平和の象徴でもあるように、自然と仲間作りにつながり、また他人と触れ合う事もできる。

もう一つは趣味活動である。趣味活動を行うことにより、生き甲斐につながり意欲を引き出せる。料理作りやおやつ作り、裁縫に手芸、電子工作や木工工作などといった様々な趣味活動のニーズに応えられるようにしている。特に料理作りでは、協調性